

平成 21 年度第 2 回宇都宮市冒険活動運営協議会会議議事録

○日時 平成 22 年 2 月 25 日 (木) 10:00 ~ 12:30

○会場 宇都宮市冒険活動センター 会議室

○出席者氏名

- ・小林利明委員 ・神長信夫委員 ・福田智恵委員 ・佐藤ハツエ委員 ・森川澄子委員 ・遠藤 忠委員(会長)
- ・沼尾順市委員 ・川口静夫委員 ・五十嵐市郎委員 ・若林秀世委員 ・入江尚見委員

(事務局) 谷田部正一課長補佐, 塩田雅明所長, 海老原勝副所長, 稲澤正明指導主事, 矢野 学指導主事

○公開 (傍聴者の数 0 人)

- 1 開 会
- 2 会長あいさつ
- 3 議 題

(1) 報告事項

① 平成 21 年度事業報告について・・・資料 1-①, ②

ア 学校受入事業

事務局 : (資料にそって説明)

会 長 : 報告事項の①アのところまでについて説明をいただきました。学校受入事業に関して、ご意見、ご質問いかがでしょうか。

福田委員 : よい活動をしていると関心いたしました。コンパスの使い方の話で、学校で学ぶことが、実体験でどのように生かされているのか分かる場として非常によいと思いました。理科の授業でコンパスのつかい方を学んでいると思うのですが、それがどのように実生活に結びついていくのか分かる大切な視点であると思います。

子ども達は、自分たちでいろいろと考え、時間をかけて次のステップに行くのですが、なかなか時間を十分につけられない現状もあります。冒険活動センターでは、見守ることも大切にされていて、子ども達が主体的に活動していると聞いています。その見守ることについて、どのような技や心得があるのでしょうか。

また、宇都宮市での取り組みとして行っている冒険活動教室ですが、他県や他市でこのようなコンセプトで行われている施設があるのか教えていただきたいです。

時間・空間・仲間の「3つの間」を冒険活動センターが作り出していることがすばらしいと感じました。

会 長 : 指導上の配慮事項に関して、子どもに対する支援の仕方について話がありました。もう一点は、類似の施設があるのかといったことでした。事務局からいかがでしょうか。

事務局 : イニシアティブゲームを例に話をさせていただきます。支援に入った職員は、活動において、内容やルールの説明を行い、さらに安全上の話をしています。課題を解決する際のキーポイントになることに作戦を立てることが挙げられます。その作戦内容については、職員はじっと我慢の見守りの姿勢で支援しています。うまくいかずに失敗を繰り返すこともありますが、子ども達は、その都度、次の方法を考え課題解決していきます。失敗を繰り返すと子ども達のモチベーションが下がることもありますが、その場合は、職員がやる気を盛り上げ、支援を行っていきます。普段の学校の授業では、毎日の進めていかななくてはならない内容があると思います。しかし、ここではそのようなものはありませんので、じっくりと一つの課題解決に向き合い、取り組ませることができます。

もう一つの施設の件ですが、他市では、真岡市、鹿沼市、大田原市があります。真岡市では冒険活動センターができる前からたくさんの学年で実施している実績があります。鹿沼市では、3~4年前から直営の施設で行っています。大田原市でも独自の施設で行っていると聞いています。

所 長 : 冒険活動センターは、宇都宮市が進めている日本一事業のひとつになっています。中核市の中で指導支援体制は日本一であります。他の施設では、場所や道具はよいのですが、施設や場所だけの貸し出しが中心で、準備から当日の支援に関して、公の施設としては、他にこれほどやっているところはありません。

民間では、力を入れてはじめており、似たような形でやっているところも出てきていますが、費用の面では高くなります。おおよそ、1泊1万円かかります。

今後も、日本一事業に手を挙げていきたいと考えています。

福田委員 : ひたすら待つという話でしたが、それでもクリアできなかった場合、何か得るものがあるのでしょうか。

所 長 : ほとんどがクリアしています。98~99%は、成功できているのではないのでしょうか。できないときには、その後のふりかえりの時間の中でカバーしています。

福田委員 : どのような意見がでるのでしょうか。

事務局 : 子ども達から多い感想では、自分ひとりではできないことでも、力を合わせて行うことでできると実感したといったことが挙げられます。高さを必要とする活動では、土台の人は、ひたすら頑張っており、その子に対する気遣いの言葉など聞かれます。力を合わせて行うと気持ちがよいといった意見がでています。

福田委員 : 失敗した子、クリアできなかった子どもの感想はいかがでしょうか。

事務局 : 失敗したというよりも、頑張りがかったが時間が足りず、もう少し時間があればできたかもしれないといったことが多いです。その際には、今回は3人登ったことで、クリアにするとといったように課題を代えて行っています。そのように支援をしているので、できなかったからためであるといったような後ろ向きの気持ちで終わらせないようにふりかえりでカバーしながら、子どもたちに満足感を味わってもらえています。

神長委員 : 陽南中の件は、延期になっているのでしょうか。陽南中からは、今の時期に行きたいといった要望はあったのでしょうか。

所 長 : 今回の陽南中の件ですが、1泊でも日帰りでもやってもらいたいと代替案を出しました。陽南中に3回足を運んで日程を詰めていきました。センターの提案としては、3月の2週目を提案させていただきました。しかし、陽南中のほうは、その時期は卒業式も近いことから厳しいとの回答を得て、学校教育課も交え三者で話し合い、那須甲子青少年自然の家で行うことになりました。宿泊体験活動をゼロにしたいという保護者を含めた要望からそうなった経緯があります。今後もインフルエンザでの延期が予想されますので、代替日を生み出していこうと考えています。

会 長 : よろしいでしょうか。他にいかがでしょうか。それでは、先に進めさせていただきます。

① 平成21年度事業報告について・・・資料 1-③,④,⑤,⑥

イ 主催事業

ウ 利用状況

事務局 : (資料にそって説明)

会 長 : 報告事項のイ、ウについて説明をいただきました。ご意見、ご質問いかがでしょうか。特にないようでしたら、次に移ります。

② 平成22年度事業計画について

ア 学校受入事業

イ 主催事業

事務局 : (資料にそって説明)・・・資料2

会 長 : 来年度の事業計画について、ご質問・ご意見をお願いします。特に地元との連携や他の団体との連携についての話がありました。地元や他の団体と連携を深めていけないのか。その点に

ついて、いかがでしょうか。

沼尾委員： 子どものもりフェスティバルの件ですが、今年は11月8日の実施であり、宇都宮市内では、餃子祭りがありました。テレビでも放映され、市をあげて餃子で名を挙げようと頑張っている中で、同日に行うのは、中心部から離れたこの地では、足を運びにくかったのではないのでしょうか。その中で来年度は、日程をずらしているの、よいのではないかと感じています。さらに、11月はいろいろな行事や秋祭り等があるので、来年度の10月の実施に関して、人集めに成功していただければと思います。

まちづくり協議会としても、冒険活動センターとのつながりを重視し、特に食材の件では、地産地消についても議論していきたいと思っています。

2月9日、市に提案した中に、市や地区の活性化、冒険活動センターの新しいプログラムの開発といった視点から、篠井地区にサイクリングロードをつくる計画がありました。自転車のまちとして、市としても検討していきたいという話を頂いているので、今後具体的に進めるにあたって、どこを出発点にし、自転車の管理をどこで行うのか等、地域や冒険活動センターと連携していきたいと考えています。

小林委員： 学校のローテーションについて、利用計画の中で、小学校と中学校のわけ方の考え方というものがあるのでしょうか。宿泊時期の実情を考えると小学校を前半に行うといったことも考えられます。また、雀宮中の件で、現実的に施設として夏休み中の対応は可能であり、学校の要望に答えられるのか伺います。

事務局： 小学校、中学校の時期についてですが、中学校は1校あたりの人数が多く、ロッジだけの収容が難しく、常設のテントでも宿泊を行っています。3泊のうち、男子が2泊、女子が1泊といったようにロッジとテントの両方を使って実施しております。中学校の宿泊には、テントが不可欠であり、冬場のテントは生活上厳しいのではないかとということで、テントが活用できる時期に入っています。

夏休みの活用の件ですが、これからの検討事項になります。前半は、中学校が、中体連の大会と重なり難しくなります。逆に小学校では活用しやすい時期になり、活用の余地がでてくるのではないかと考えます。

会長： 他にないでしょうか。

入江委員： 小学校と中学校の同日の利用は、考えていないのでしょうか。活動で小学生と中学生を混ぜて行くと中学生がスタッフの立場の気持ちもはたらき、おもしろい活動になるのではないかと思います。

また、主催事業では、ヨモギを摘んで、草もちを食べるといった活動を春の季節に行ってみてはいかがでしょうか。

リバートレッキングは、自然と一体できる活動だと思います。その活動を通して、自然のありがたみを自覚しやすいタイミングで、ゴミについての話をしてみてもいいのではないかと。栃木県は車道にゴミが多いと感じています。子どもがそれを見てどんな気持ちになっているのかと考えてしまい、嫌な気持ちをもっていました。ゴミが、自然を壊してしまうことを伝えていける活動があってもいいのではないかと思います。

また、静かに話を聞くことができない子が多いと聞いています。たくさん興奮しないと抑制力を育てることができないという話を聞きました。いっぱい遊ばせないと抑制もできないものです。例えば、冬の朝一番の活動では、体をあたためる活動で楽しませる活動をさせてからだと集中させることもでき、よいのではないかと考えます。

会長： いろいろご意見ありがとうございました。

事務局： 小学校、中学校の交流の件ですが、主催ではありますが、学校受け入れでは今までに行ったことがありません。小学校、中学校の現場の先生と相談しながら考えていければと思います。また、ゴミの件ですが、冒険活動センターで、カヌー体験では、活動前にゴミを拾っています。そのゴミをみせることもあり、環境に目を向けた活動をもっと広めていければと思っています。

小林委員：話を聞かせる現状に関して、最近の子どもたちは、授業中であっても姿勢が保たれず、私語が多く、ふっと立ち上がってゴミを捨ててしまう子もいます。きちんと目や耳で話を聞けない状況になっています。子ども達の気持ちを授業に向かせることが大切であり、そのことが難しいといったことが一般的傾向になっています。授業の中で集団をコントロールさせ行うというよりは、自由に行う授業形態が多くなっています。そのようなことから、話をしっかり聞くことができにくい状況が生まれてきています。それを実際にどうしていくかが課題です。

入江委員：長女の1年生の授業参観を見て、自分のときと比べると幼稚だと感じました。教科書を見ても字が少なく、絵や図が多いと感じました。

長女の通った幼稚園では、空気を読むことを教わってきました。先生は黙って静かになるのを待っていました。子ども達は、その空気を読んで動いていると感じました。そこで学んだ娘は、小学校の先生は怒っている声が、うるさいと言っていました。また、友だちと遊ぶ中で、みんなで解決して遊ぶことができない子がいます。かわりを通した遊びをしてきていない子が多くなってきていると感じました。人間関係を有効にできるように育てようといった教育観で行っているところでした。そのようなことから、怒鳴らなくても子どもたちを導いていける方法はないのかと感じています。

小林委員：話を聞くといったことの延長線上にある社会性が問われる問題がでてきているといえます。学校教育でも社会性をどう育てていくかが課題となっています。しかし、学校教育の中で、社会性を育てるには、限界があると感じています。いろいろなことに関して縦割り班で行っています。異学年の活動として、クラブ活動等が挙げられ、社会性を育てようと積極的に取り組んではいます。しかし、下校時間が早まっているといった現状から学校教育では限界もあります。そのような中で、冒険活動センターで行っているプログラムは、まさに学校でできない部分を行っていると感じています。社会教育でやるか、学校教育でやるかが問題になりますが、学校教育で行うことが効率的であると考えます。この施設は、そのようなことができる場であるので、どのプログラムをどの時期にやっていくか考える時期が来ていると思います。

宇都宮市も学力の向上を掲げていますが、市としても本気になって、宿泊学習を考えて欲しいものです。宿泊学習を単純に学年と日数だけで割り振るのではなく、子ども達の力を育てる視点にたって考えてもらいたいです。ある学年で同じプログラムを年に2〜3回やってみるといった試みを行い、目的をもって子どもを育てるという積極的な活動を取り入れ、もう一度見直して欲しいです。市にはそのような考えをもってやってもらいたいです。力を育てたいものに対して、それが何年生で行うとよいといった手ごたえがあると思うので、考えをもってやってもらいたいです。学校としても手ごたえがないわけではないです。真岡市の成果等も利用して、宿泊学習においては、総合的な見直しをしていかなければならないと感じます。海滨の施設の問題もあるので、特にそのように感じています。

会 長：大きな学校教育のデザインを考え直すということですね。

学力テストでは、秋田県、福井県は、全国1位、2位となっており、体力テストでも1位、2位を分け合っています。あまり教育が進んでいない地域のほうが、成績がよい結果になっています。それは、地域と学校の結びつきが非常に密接であり、地域が学校を支え、自然と地域・学校間の人間関係が作られています。そのことが学力を支えているといった現状が研究で分かっています。教育的な仕組みが整っているところは、未だ出口が見えずにいるのではないのでしょうか。学力も人間形成も壊れていくのではといった心配が出てきています。

大きなランドデザインを考え直して、人間を育てていかなくはなりません。学校教育をどのように考えていくかが問題であり、これからの課題であります。その中で、このような施設がひとつのよい条件になっていますので、今後グレードアップしていただければと思います。

協議事項について事務局からお願いします。

(2) 協議事項

① よりよい冒険活動事業をめざして・・・資料 3

事務局： (資料にそって説明)

会長： 説明いただいたことについて、ご質問ご意見をお願いします。

若林委員： 冒険活動センターの事業の中味について、自然環境とのかかわりが薄いのではないかと思います。もっと環境にも目を向けて、ここでの体験学習は、学校ではできないもので、生物と人間とのかかわりの中でもう少し深化させていけると考えます。

また、危険についても考えさせられる点が多くなってきています。こちらの施設の中でも利用の仕方によっては危険なものがあると思います。管理責任の問題もあるという考えもありますが、自己管理を意識づけることは、保護者の役割であり、意識改革が必要でないかと感じています。冒険活動センターでの体験を通してより効果的に取り組んでいただければと思います。

会長： 自然環境、自然との関わりについて、事業内容が手薄ではないかという指摘が出ましたが、事務局はいかがでしょうか。

事務局： 幼少期に自然に多くふれ、「きれいだな」「いいものだな」と体験を通して感じたことのある人は、大人になっても自然を大切にするといい統計データを見たことがあります。小・中・高校で知識として学んだだけでは、大人になっても自然を大切にす行動には結びつかず、知識だけではだめで、心まで育てていかないといけないということなのでしょう。ここでの活動がその担い手になれるよう、これからはしっかりやっていきたいと思っています。

会長： 冒険活動事業の充実の中で、学校利用のアンケートに関して、うまく進んでなく苦勞しているという話がありました。今までは、心理学会が作った既成のものを使用してきて、一定の成果を得ました。次の段階として、今までのアンケートでは、子ども達のニーズに対応しているのか、子ども達の期待感を受け止めて、それを膨らますものとなっているのかということから、子どもの目線にたったアンケートを作っているところと聞いております。子ども達が自然体験をして、また来たいといった心を育てているのか、どういう思いで帰っていくのか、どういう気持ちでプログラムが実施されているかを調べるアンケート開発であり、しっかりしたものをつくりたいということで行っています。アンケートの開発は、手間がかかり、苦勞されていることでしょう。これは、指導主事が常駐しているからできる研究・開発機能であると考えます。よいものになることを期待しています。

他にいかがでしょうか。

福田委員： 小中一貫教育についての対応ということで、来年度から、地域学校園のモデル校で先行実施が始まります。小学校の組み合わせについてもすでに配慮していることですが、それらを念頭においたプログラムの開発をお願いしたいものです。

各学校に魅力ある学校づくり地域協議会が設置されており、学校や地域の中で、相互に子ども達を育てようとする活動が進められています。そこに冒険活動センターの情報が提供されていくといいと思いました。プログラムやねらいもしっかりされているので、これを使おう、ここで行おうと考えるところも増えていくと思います。学校利用とは違うところでも活用されていくことでしょう。

学校の学びを身近なものとして体験できるというのもここでのよさだと感じますので、それぞれの体験した学びを実感できるものにしてもらいたいです。例えば、環境は大切だと言葉では言っている中で、実際にどうすればよいのかなどと行動につなげるプログラムを展開していただければと思います。指導者が、感じていれば伝わっていくことだと思います。

体験の中で、五感は、忘れないといわれています。自然のにおい、春のにおい、土のにおい、草のにおいを感じることは大切であり、またあの時のにおいをかいてみたいといったようにつながっていきます。においや音に関しても、プログラムにあってもいいのではないかと考えます。

子どものニーズをアンケートに取り入れるという話題がありましたが、子どもの権利条件

にあるものも利用できるのではないのでしょうか。そこから広がるものもあると感じました。

子どものマナーに関しても、中学2年生で宮つ子チャレンジがありますが、事前指導で中学1年生に書かせた作文の中に、もっとマナーを知りたい、マナーが大切であるといった意見がありました。子ども達の思いもあるので、学校教育の中でも、家庭の中でも、野外教育の施設の中でも、将来仕事に出たときに大切であるマナーを意識して指導していただけたら効果的であると思います。

保護者の話ですが、市P連での取り組みで、保護者にも親に振り返りをやってもらうことを進めています。PTAでも少しずつ、親も学びたいといった要望に答えられるように学校と一緒に考えていこうといった活動をしています。保護者にもそのような方向で働きかけをしているので、手を組んで子どもを育てていければと考えています。

もう一つ、施設の修繕に関して、シックハウスの問題も考えてもらいたいです。アレルギーとの関係も言われているので、基準値以内だからよいといったものではなく、気を配っていただければと思います。香料の自粛も利用者に訴えていただけたらと思います。

会 長 : 来年度から試行が始まる小中一貫教育に関して質問がありましたが、センターでの対応についていかがでしょうか。

所 長 : 具体的には、来年度から小小交流を意識的に日程に組み込みました。まずは、地域学校園で学校の利用日を同じ日程にして活動の中で交流していくことを考えています。

会 長 : 地域学校園での取り組みがあるんですね。

所 長 : 課題として、物理的にすべての学校を地域学校園で一緒に行くことは難しいです。そこで、規模の小さな学校からまず一緒に取り組んでまいります。

沼尾委員 : 地域という言葉が良く使われるようになっていますが、行政との関係では、なかなか実質的でないことが多いです。特に教育界は縦割りを強く感じています。

佐藤委員 : 異年齢集団のグループがあると聞いていましたが、社会団体も異年齢で行っております。来年度、学校の利用状況を見ると小小の交流ができそうで、冒険活動センターにおいてそのことが、実現可能ではないかと感じました。

五十嵐委員 : 新しい事業の検討があると思うのですが、今後、親学を取り入れていただければと思います。野外調理などは、親学に入れて行っていくと効果的であると思います。ナタを使う講習等も一緒に入れられるのではないのでしょうか。そのように、ここ冒険活動センターでしかできないことを親学で行って欲しいものです。そのことによって一般の利用の促進にもつながるのではないのでしょうか。また、幅も広がるのではないのでしょうか。そのようなことに目を向けて行って欲しいです。

福田委員 : 冒険活動センターで親学ができるとなると利用も増えると思います。作っていただいて、学校に配っていただければと思います。

会 長 : 親学体験もできるという利用者に対するキャッチフレーズも増えていくというわけですね。

若林委員 : プログラムの件で、ゼロの項目もあります。自然観察体験が少なく、その部分をもっとアピールしていく必要があると思います。また、保護者にも参加していただいて、ハングリー精神を掘り起こすようなプログラムを入れていただけたらと思います。

会 長 : ありがとうございます。他にいかがでしょうか。以上で協議事項を閉じます。

事務局 : 以上をもちまして、第2回冒険活動運営協議会を閉会いたします。ありがとうございました。